

描画（アート）活動がもたらす心豊かな格差のない社会づくり

個の表現とグループでの表現活動

Creating a society with rich and spiritless gaps brought about by drawing (art) activities

Expression and group expression activities

大場 六夫

Mutsuo OHBA

概要

内閣府が2015年に調査の結果によると、15歳から39歳のひきこもりの人数は、推計値で54万1千人となっている。前回調査の2010年に比べると、人数の減少は見られるものの、ひきこもり期間が7年以上続いて長期化していると答えた人数は増加している。その現状は、親の高齢化により本人も年をとり、今まで親を通して社会との関係をかろうじて持っていたが、それが切れて家族ごと社会から閉ざされるケースが多くなっている。なかには、自ら社会と離れ生活保護を受給されながら、ひきこんでしまっているケースなどがある。本稿では、上記に述べた人々を対象にして描画（アート）を取り組んできた過程と、その後の経過について論じることとする。アートの対象は、ひきこもりの状態であるとともに何らかの障害をもった若者であるため、これが社会参加を促す結果となった。これらの描画（アート）での取り組みを紹介する。

キーワード：ひきこもり、障害者、美術、理解、美術教育、現代社会

I はじめに

筆者が提唱する描画（アート）の取り組みの、初期の段階での活動である「創作の時間」とは何を意味するかを説明する。筆者は、今日まで、デザインスクールで22年間、仕事をしてきた。その間に多くの人にデザインや描画を指導して教えてきた。その中で非常に印象に残る出来事があった。以下の出来事が、デザインスクールで「創作の時間」に取り組むようになった原因である。

今まで、アートとは、無縁だった受講生たちが、手描きを中心とした創作的な訓練をスクールで受けたことにより、絵を描くことを通して自分を表現する楽しみを実感し、新たな自己を見出せるようになった。そしてその後に、デザイナーとして就職をしたという事実がある。筆者はこの経験から、スクールの授業科目「イメージトレーニング」で培った創造に対する指導力を吟味することにより、「創作の時間」というプログラムを開発することに至った。

創作の時間とは、これまで全く絵を描いた経験のない人を対象にしたアート活動であり、これといった決まりのない、ハードルの低い自由な直線と曲線を、鉛筆で描くところから始まる。線をどのように描くなどの指示は、指導者からは全く行わない（図1参照）



(図1) 鉛筆のみでランダムに線を描いた状態

その後、ランダムに描いた線で上記の形が生まれる。そこにクレヨンで自由に色を選び着色をする。(図2)



(図2) クレヨンで着色後の仕上がり状態。

なぜ、クレヨンという画材で着色をしなければならないのかと、疑問を持つ方もおられるだろうが、ここはクレヨンでないと困る理由がある。現在、筆者が活動の対象としているのは、ひきこもりの当事者たちである。彼らの多くが、引きこもりだけでなく、統合失調症や発達障害などの症状を併せて患っているケースが多いからである。彼らの特徴の一つは、障害を抱えているために、創造活動に長時間取れないことである。つまり、体力的に長時間にわたり、作業することが望めないからである。これまで筆者が関わった例の範囲で述べるなら、長くても約60～90分が作業継続の限界であった。その短時間に着色をするためには、水彩絵の具等、準備が必要なものより、思いつけばすぐに作業に入れるクレヨンが最適な道具である。さらに、手の力が微弱な障害者もおられるので、色鉛筆よりも色が濃く着色ができるということからセレクトしたものである。

II 本研究の目的

描画（アート）の活動をすることで、障害をもったひきこもりの当事者に、創造性をわき起こすことが出来るようになり、それが後に、彼らのコミュニケーション能力の向上につながるのではないかと筆者は考えている。また、描画（アート）に取り組む過程で思考することにより、論理的な考えがもてるようになるのでは、さらに絵を自由に描くことから、直感的に行動ができるようになるのではないかと考えたからである。創作活動の様子から、彼らの心の中に変化が起こり、さらにそれを描画（アート）で取り組んだ作品の変化に表現されることにより、それが原動力となり、彼らの社会参加につながるのではないかと考えたからである。この一連の創作活動の効果について、本稿において、筆者が検証することとする。この創作の時間の取り組みは、ひきこもりの当事者にとって、描画（アート）活動のスタートと位置付けている。

III ひきこもりの該当者の実態から

(1) 広義の引きこもりの定義

内閣府調査によると、広義のひきこもり群の実態については、次のように具体的に定義されている。「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事のときだけ外出する」「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」などである。現在の状態となって6ヶ月以上の者から、「現在の状態のきっかけ」で「病気」のうち統合失調症又は身体的な病気、または「その他」のう

ち自宅で仕事をしていると回答をした者と、「ふだん自宅にいるときによくしていること」で「家事・育児をする」と回答した者を除いた者を指している。

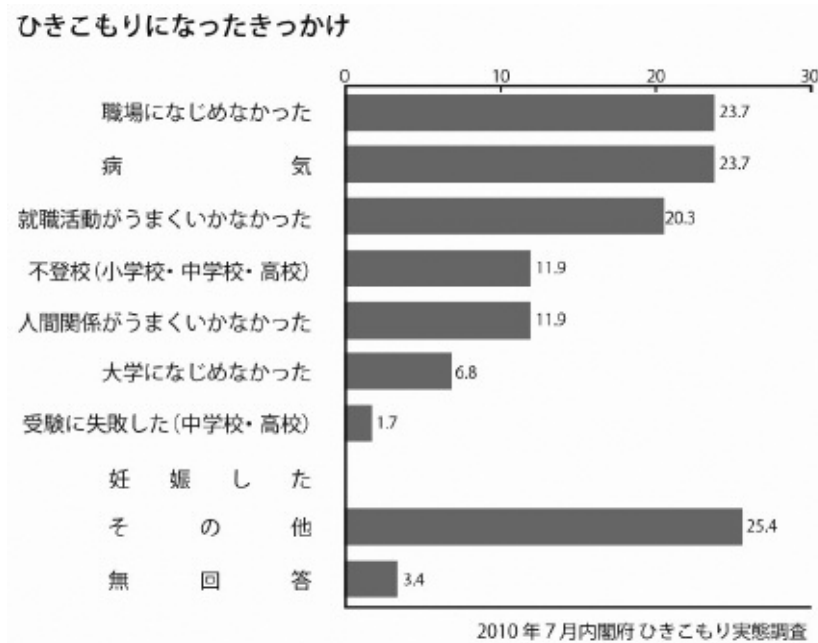
「ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する」者を含む広義のひきこもりの人数は、内閣府の2010年の調査によると、69.6万人と推計されている。

(2) ひきこもり親和群の定義

親和群の定義なので、該当者は、ひきこもりではない。彼らの定義は「家や自室に閉じこもっていて外に出ない人たちの気持ちができる」「自分も、家や自室に閉じこもりたいたいと思うことがある」「嫌な出来事があると、外に出たくなくなる」「理由があるなら家や自室に閉じこもるのも仕方がないと思う」の4項目が、すべて「はい」又は1項目のみ「どちらかといえばはい」と答えた者から「広義のひきこもり群」を除いた者が親和群に属する。

(3) ひきこもりになった原因

内閣府（2010）「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」から引用



ひきこもりの原因は、一人ひとりの環境的な背景や該当者自身の特性もあるので、これがそうだと決めつけることは困難であるといわれている。しかし、上の棒グラフから考えると、該当者の周囲の物的及び人的な関係性の不適合とともに、何らかの併せ持つ病気や障害が関わっているように筆者は思う。現実に筆者がアートでかかわっている人の中にも、このような人が多くおられる。

(4) 発達障害者がひきこもりになるケース

現代社会では、多少変わった言動があっても、学校の成績が良く、職場での仕事が効率よくこなせれば、さらに家庭環境に恵まれて、周囲の支援が十分にある、本人が発達障害であることには気づかれない場合がある。最近「大人の発達障害」が問題となっているように、大人になるまで、何かおかしいと思われても、気づかれないままの場合が少なくない。これは、発達のアンバランスの程度が軽いと、生活上で本人が困っていることが見過ごされてしまうからである。しかし、そのまま過ごして行く内に、何らかのきっかけで学校や職場に適應できなくなり、学校や職場に行くことを辞めてしまう。そうした経過から、ひきこもりになって社会参加できなくなってしまうケースが増加している。

厚生労働省では、ひきこもりを『自宅にひきこもって学校や職場に行かず（社会参加をしない状態）、家族以外との親密な対人関係がない状態が6ヶ月以上続いており統合失調症（精神分裂病）やうつ病などの精神障害が第一の原因とは考えにくいもの』と定義している。つまり厚生労働省は、自宅療養を必要とする病気を患っていない者で、外出しようと思えばできるにもかかわらず、長期間に渡って外出しないものを「ひきこもり」として、考えているようである。

このようなひきこもりの人の特徴として、次のようなことが挙げられている。

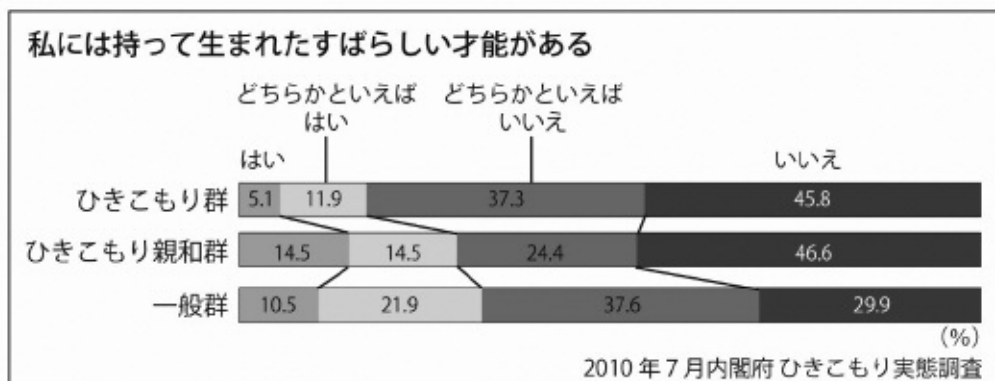
- ・多くは不登校から長期化している。（受験の失敗、就労の失敗等挫折経験をしている）
- ・一度就労経験があってもひきこもることはある。
- ・ほとんど自室に閉じこもり、昼夜逆転の生活を送るが、夜間や家族と一緒に等の条件付きで外出することも多い。
- ・ひきこもり→孤立感→精神症状に悪影響（自己評価低下、うつ）→身体にも悪影響（強迫症状、対人恐怖症状などの精神症状を示す場合もある。）
- ・放置すると自然な回復が期待できない。
- ・随伴しやすい精神症状として、不登校、対人恐怖、被害関係念慮、強迫症状 等
- ・関連する疾患、統合失調症、発達障害、人格障害 等

筆者はアート（創作の時間）を通して彼らと接しているが、ひきこもりと発達障害を併せ持つ人は、特に大きな不安感情を持っている。筆者が、彼らと話す中で感じた不安内容の主なものを紹介する。

- ・仕事が本当にできるのか不安だ（不安要素）
- ・どうせ僕にできない（諦め要素）
- ・どうやったら社会参加できるんだろう（情報不足）
- ・病気が発病して迷惑をかけるのでは（不安要素）

しかし、一方で下記のグラフのようなデータもある。このグラフから読み取れることと、筆者がひきこもりの当事者と福祉活動を行って感じたことは、同じように思える。つまり、彼らの経験の中で定着した、自信の無さとか自尊感情の低さが、ひきこもりに陥る大きな要因になっていると推測した。

そこで描画（アート）による取り組みによって、自己の才能についての自信の回復に務めることが、彼らが、ひきこもりから脱出する一つの有効な方法ではないかと考えた。



IV 描画（アート）の取り組み 1

(1) 実施対象者

なんらかの障害のあるひきこもりの若者（206名）

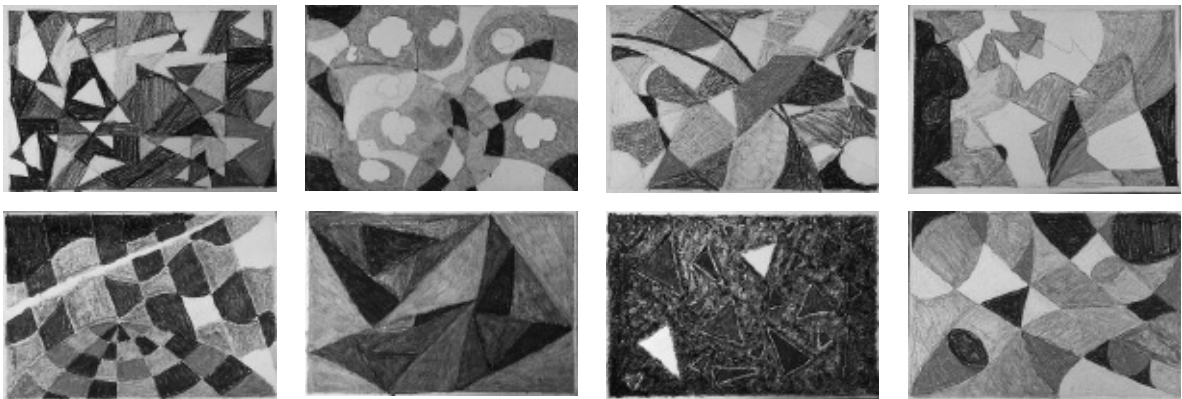
(2) 実施内容と方法

初回の取り組みとして、先述したように、まず自由な線描を行い、それに自分なりのイメージをもって着色して作品を完成させる創作の時間の活動を設定した。線描後の着色はクレヨンに限定し、作業が短時間で有効のできるように配慮した。ただ、絵を自由に描かせているだけと誤解されるかもしれないが、筆者は彼らの作業の時間も、共感的な肯定的な声掛けを絶えることなく行っている。決して、作品に対しての指示的な否定的な発言は行わない。

以下の表は、一般の絵画教室の指導と、筆者の考案した創作の時間を比較したものである。

「創作の時間」の手順(一般の絵画教室と比較して筆者作成)		
手順	一般の絵画教室	創作の時間
モチーフに対して	当日描くモチーフの説明を受ける (概念1)	何もしない
構図について	モチーフに合わせ構図を作成	自由に描く
講師からの指導	モチーフに合わせアドバイスを 受ける(概念2)	指導はない 手順のみ教わる
全体の構成	講師からの指導が入る (概念3)	色の区別が判断しづらい 認知症や視覚障害者に対し クレヨンの色の説明をする
仕上がり	完成した絵に対し先生から 講評を受ける(概念4)	完成後、同じ参加者同士で意見を 出し合う。その後、自分の作品が 仕上がるまでの気持ちなどを 話し合う。言葉で語れない方は、 表情で判断したり、コメントを 書いてもらう
画材	画用紙、鉛筆、消しゴム、 色鉛筆、クレヨン、絵の具 など	画用紙、鉛筆、クレヨンのみ

(3) 出来上がった作品と検証



制作時間90分

作品が仕上がって、自分自身の作品に対する該当者の感想を紹介する。筆者は、彼らが描画活動を通して心を開いていき、自分を再度見つめ直している様子が伺われると感じた。

- ・自分なりに考えて描いたので、仕上がった時は嬉しかったです。
- ・もう少し色の種類を少なくしたことでまとまり感があったかもしれないと思いました。
- ・水色と青色が多すぎました。(空をイメージしたのですが)

- ・色合いは、好きな色です。
- ・赤色とオレンジ色をもう少し足した方がよかったです。
- ・今日はできるだけ綺麗な曲線を描いてみようと思いました。
- ・面積の大きすぎるところができるだけないようにしました
- ・風にたなびく太陽の光と草原と空をイメージして、この形になりました。
- ・仕上がっての気分は少し満足感があります。

作品を完成した後に、他の人の作品を相互に見せ合う場を設定した。その時の感想を紹介する。筆者は、彼らが他者の作品に対して肯定的・共感的な意見を多く出すことに驚いた。

- ・線が美しい。
- ・伸びやかな構成が、美しいと思った。
- ・自分では表現できない色の組み合わせに美しいと感じた。
- ・次回の作品のヒントにしようと思った。

創作の時間の活動を指導しながら、筆者は彼らのつぶやきはもちろんのこと、継続的に活動に注目した。その過程で筆者が、彼らに対して気づいたことや感じたことを次に何点か述べる。第一は、彼らの描いている様子の変化である。描き始めの不安な状態から、描いていく内にどんどん表情が和んで行き、仕上がった時には、達成感による笑顔になっている人もいた。第2は、仕上がった作品をお互いが見せ合って自由に意見を述べる場面である。彼らは、他者の作品を観ることで、自分との相違点を見出し、それを肯定的・共感的に受け止める態度や言葉が多く表出した。つまり、グループ活動により、相手を敬う心が生じていると考えられる。さらに、集団の中での自分の立ち位置が、認識できるようになったのではないかと思う。

作品の仕上がりには時間差が生じるが、自分の作品が先に仕上がっても、他者の作品の創作を見るなどして、待つという行動が可能になってきた。他者に全く関心がない、創作活動に興味があれば、自分の作業が終われば、待つことが出来ないだろう。

創作の時間は、グループワークであるため、当初、参加が困難で戸惑いがある人もいたが、回数を重ねることで、集団の中での自分の立ち位置が明確になってきたようである。その上、自分自身の作品を他者から褒められることが喜びとなり、その嬉しい気持ちが、絵を描くことの楽しみとして繋がり、次回の創作の時間の活動を期待するようになる。そのことが、自己肯定感の上昇につながり、描画（アート）の取り組みを継続して深めることができたと考える。

V 描画（アート）の取り組み2

(1) 実施対象者

なんらかの障害のあるひきこもりの若者（1800名）

(2) 実施内容と方法

創作の時間の応用的な活動として、マッチ箱アートと取り上げた。マッチ箱アートとは、幼児から高齢者まで、障害の有無に関係なく、プロの作家も参加できる創作活動である。立体的な無地のマッチ箱に、自由な絵を描くというアートの取り組みである。マッチ箱一つひとつが異なった表現をされ、多くの完成したマッチ箱を眺めると、そのマッチ箱自体がその作者に見えてくるから不思議である。

2018年3月末に展示会開催時には、1500個のマッチ箱が展示され、9月の開催時には4000個のマッチ箱が集まり、

その展示は華やかな雰囲気であつた。この取り組みや展示会で、特筆すべきことは、ひきこもりの若者が多く参加してくれたことだつた。それは、ひきこもりの若者の支援者が、彼らの自宅に無地のマッチ箱を届けることから始まつた。彼らが、マッチ箱アートを描き終えれば、各自でギャラリーに持参することをお願いした。つまり、自分なりに工夫した作品を、ギャラリーに届けることが、彼らが自主的に外出するきっかけとなつた。

【マッチ箱アートの作品と展示会場】



マッチ箱展の紹介の掲載は、京都新聞をはじめ、その後も産経新聞等に3回紹介された。会場の雰囲気を理解いただくために、2018年3月31日の京都新聞の記事を一部紹介する。

1歳児からプロの芸術家まで、多彩な人が描いた約1500点のマッチ箱が並んでいる。左京区のNPO法人「若者と家族のライフプランを考える会」(LPW)でひきこもりの人たちの創作活動を支援する芸術家大場六夫さんが企画した。4センチ×6センチのマッチ箱は、画用紙よりも小さいため、気軽に参加でき、より多くの人に芸術を身近に接してもらえと考へたという。出品者はLPWの利用者や家族、大場さんともっとも縁のある総合支援学校の生徒、プロの画家まで多岐に渡り、心身の不調で自宅から作品を郵送する形で参加した。会場を彩る作品は、クレヨンや絵の具で彩色したものから細かく切つたフェルトに写真貼つたものまで多様で、一つ一つ作者の個性が伝わってくる。大場さんは「アートは心を豊かにしてくれることを感じ取ってくれれば」と話している。

マッチ箱点に作品を出品したひきこもりの当事者のなかで、一番多かつた感想は、「美術が好きになつた」である。このことは、筆者にとって、何よりも嬉しいことであつた。続いて多い意見は「美術を習いたいと思つた」「もっと描きたくなつた」「自分の作品が展示されてとても嬉しい」「描いたことで楽しい気持ちになつた」「楽しく描けた」「素敵な企画だと思つた」などであつた。

VI まとめ

筆者が、創作の時間の活動を始めたのは、2016年3月である。京都市右京区役所でスタートをした。当初は、アートの普及が目的で、ハードルを低く設定した描画教室的な活動であつた。区役所で始めたきっかけも、そういった主旨に基づき、誰にでも参加ができるという趣旨を最も重視した。

そうした「誰でも参加できる描画活動」が広がって行くとともに、高齢者施設から施設の利用者さんの憩いの場として描画活動をしたという内容での依頼があった。その後も同じような主旨のもとに、多くの施設関係者からの依頼を受けて活動は広がって行った。そういったネットワークの広がりを感じながら、社会はプロの芸術だけではなく、日常生活と結びついたアートに関心が高いことを改めて認識した。崇高な芸術性を追い求めることだけが、展覧会で入賞するような作品を描くことだけがアートではない。どんなに幼くても、どんなに高齢でも、どのような環境にあっても、アートに関心を持ちその活動に参加することにより、誰もが心豊かな格差のない社会づくりに参画できると実感した。このことは、施設や団体、個人がきっかけさえあれば参加したいと思う人の多さからも分かった。

2016年10月から、筆者はひきこもりの若者を支援する施設において、描画活動の指導を始めた。ここの施設の利用者は、障害があると同時にひきこもっている若者が多く、ほとんどの人が病院や支援者からの紹介で入っている。

全く絵が描けないが絵が好きなの人もいた。今は描けなくても、いつかは絵が描けるようになり、活動をしたと思っている利用者も多くいる。ところが、気持ちはあっても、社会から閉ざされて生活をしている利用者であるため、困難な面があった。そこで、筆者は、グループでの描画活動や、描画（アート）に向き合える環境づくりの指導を、どのような導入にするかを考えた。

その時に、筆者が「自由」をキーワードに提案したのが、「創作の時間」であった。落書き感覚で自由に描ける創作の時間は、この施設の利用者にとっては好都合であり、活動自体になじむのも早かった。この「創作の時間」は、当時の特別支援教育の理念の広がりとともに、社会的にも注目を浴びた。以下に当時の京都新聞に掲載された記事を紹介する。

自由に絵を描き創作の楽しさを知る講座「創作の時間」が開かれる。(略) 住民有志が区役所を拠点に音楽や美術などの芸術を発信する「サンサ芸術の社」の取り組みの一環として企画した。高齢者や不登校児にデザインや美術を教えているNPO法人フラワー・サイコロジー協会の理事(大場)が講師を務める。月2回開き、今回のテーマは「秘めたる才能を発見する」(略) 年齢や障害の有無などは問わず、誰でも参加できる。

創作の時間は、順調に滑り出し利用者に喜んでもらっていたが、筆者は物足りなさを感じていた。せっかくグループで創作の時間の活動をしているのに、利用者同士の横との関係が全くなくて、個人的な創作活動に終始していることに疑問を感じた。

それで利用者同士の創作活動の交流を図るために、完成後にお互いの作品を見せ合い、意見交換が有効で面白いと思い始めた。しかし、先にも書いたが、日常的に社会と閉ざされた環境に生活し、なおかつ障害があるといった環境から、当初は、期待していた意見のやり取りができなかった。

しかし、その後も継続して、仕上がった作品に対して、乏しいながらも意見の交換を繰り返して行く内に、利用者たちは言葉を発するようになった。効果がないように思えても、繰り返し継続することにより、心が開くようになって行った。このようにして、創作の時間から小さなコミュニティが生まれた。

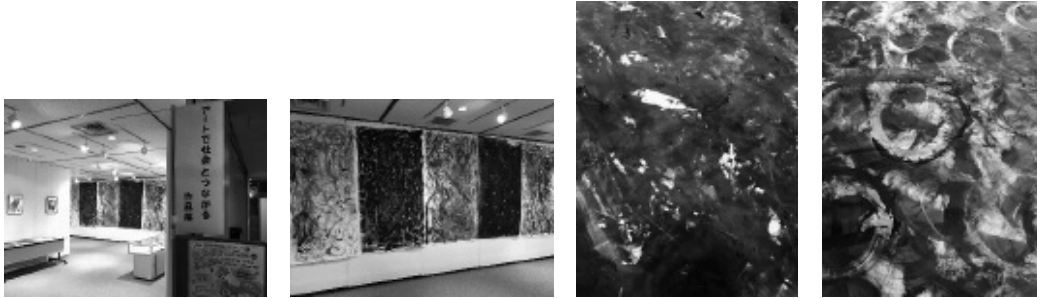
相手の意見を受け止めることができ、相手の気持ちを汲んで自身の発言ができる。最後には会話も多く出るようになり、笑いが絶えない状態にまで至った。そしてこの施設での活動は、創作の時間だけにとどまらず、利用者の将来のことを考えて、デザインやデッサンの指導まで依頼されるようになった。

全く絵を描いたことがない。これまで落書きのような自由な絵を描く創作の時間だけの取り組みから、利用者の

将来に向けたデザインやデッサンの指導について、筆者は活動として不安はあった。しかし、創作の時間で絵を描く楽しさを知った利用者は、ほとんど抵抗なく、デザインやデッサンの指導を受け入れてくれた。

「創作の時間」の取り組みは、「障害者差別防止法」の実施と相まって、社会の流れと合致していたためか、新聞等に取り上げられることが多くなった。以下に、「創作の時間」の参加者の作品で新聞に掲載されたものを紹介する。

創作の時間を始めてデザインに発展した時の掲載誌（京都新聞）



創作の時間からデッサン、デザインの講座での作品（イメージによるタペストリーデザイン）

ジャン・デュビュッフェの言葉に「正規の美術を受けずに独学や開発した表現力で作品を作る人は創作物だ」とある。創作の時間で描いている絵は正にその創作物だと考えられる。

そこから発展してのデッサンやデザイン画（図案）は、その創作から生まれていると、筆者は考える。

当初、デッサンやデザインの指導をしても、絵として反映されるまで、筆者の中では何度も葛藤があった。創作の時間で、絵を楽しんでいた時は、全く自由に描いていたからそれでよかった。どのような作者の思いの表出も、受け止め認めることが出来た。しかし、デッサン、デザインとなると、それなりの概念がある作品でなければいけない。そのことを、利用者に理解をもって止めてもらえるまでに、いくらかの時間を費やした。

そんな状況でも、以前ひきこもって、社会と閉ざしていた頃とは変化が起こっていた。それは、グループで活動をしているという実感であった。それぞれ各人は、その場のみの顔合わせであり交流であったが、その場がみんなのコミュニティになっていた。描画（アート）活動がもたらす心豊かな格差のない社会づくりとは、自分自身と向き合うと同時に、他者との交わる瞬間でもある。

それは、お互いに褒め合う、自分自身の気持ちを語る。そのような経過を通して自分の中に、素質や、才能があったことに気づく。そうして、気づいたことを賞賛されることを何度も繰り返して行く過程において、達成感を味わい、自信が生まれ、自尊感情も高まるように感じられる。アートを通して、どのような環境や条件にある人でも、集団行動や社会に対し積極的に関われる資質を育成できると筆者は考える。

今後、描画（アート）の効果の検証、今後の展開について、組織づくりや運営方法、実践者育成など課題はつきないが、この活動は、継続して行く工夫が必要である。